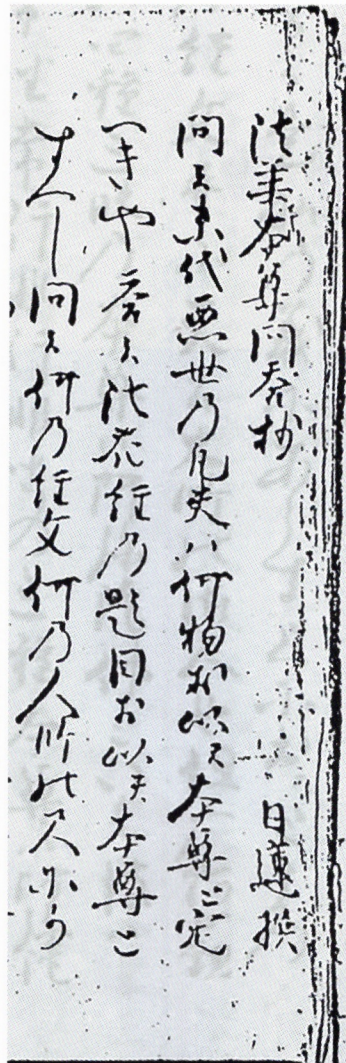




今月の御聖訓



法華本尊問答抄

日蓮撰

問フテ云ク、末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定ムべきや。答ヘテ云ク、法華経の題目を以て本尊とすべし。【問フテ云ク、何の经文、何の人師の釈にか】

(全集三六五頁)

目次

今月の御聖訓

「『観心本尊抄』その4」	菅野憲道	1
御書と日興上人 [198]	松田銘道	6
【寄稿】『日蓮遺文解題集成』発刊余話〈最終回〉	山上弘道	8
総会所感発表「姉と御本尊様のきずな」	井上真理	14
所感「書いてはいけない」	森 秀之	18
七・八月の行事 文月詠草 恵日俳壇 訃報		20

お講講話(要旨)

拝読御書 「観心本尊抄」 (全集 二二三八頁)

# 「観心本尊抄」 拝読 [四] 四十五字法体段

菅野 憲道

## 《妙法蓮華經の御本尊とは》

今回は、末法の御本尊が、本抄でどう説かれているかを見ながら、その捉え方について日興門流と一般日蓮宗ではいかに違うかを見てみたいと思います。

そのわけは、止観第五の一念三千から始まって、ただでさえ難解な天台教学に踏み込んだうえ、講師の論旨不明な説述には、聴聞の皆さんの忍耐にも限度があるでしょうから、今回は一転して本抄の中でも内容的に重要で議論の分かれるところを、単一の講話として取り上げたいと思います。

## 《四十五字法体段》

「今本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出でたる常住の淨土なり。仏既に過去にも滅せず、未来にも生ぜず。所化以て同体なり。此れ即ち己心の三千具足、三種の世間なり。」

迹門十四品には未だ之れを説かず。法華經の内に於ても時

機未熟の故なるか。

此の本門の肝心南無妙法蓮華經の五字に於ては、仏猶文殊薬王等にも之れを付属したまはず。何に況や其の已下をや。

但地涌千界を召して八品を説いて之れを付属したまふ。」

この抄出の部分は、法華經本門寿量品に入ると釈尊は発迹顕本して、寿命無量の久遠実成（不生不滅 本果妙）の仏たるを表し、所化もって同体（本因妙）であり、化導の国土も常寂光の淨土（本国土妙）たるを明かします。

つまりこれは因果国の三妙および三種世間が加わる事で、千如×三世間 三千世間となつて、瞬時の一念心に三千世間の具わることを実証されたのです。また発迹顕本によつて初めて身土不二、周遍法界等の意味も明らかになるのであります。そして、ここまで第二十番の問答を番えながら、妙法蓮華經に釈尊の因行果徳が全て具わること、理具・事具の証明、難信難解とされる草木成仏、国土成仏についての問答と証明などが続きます。

そして、いよいよクライマックスを迎えた寿量品で発迹顕本

をされたのですが、その理由について、久遠劫来、無数億の衆生を説法教化してきたが、ようやく爾前の方便を廃して法華眞実の法を説いて成仏の記別を授け、化導の縁もつきて不滅の滅を示す日が近づいたとして、残された末法の衆生の為に、久遠実成からの弟子・上行等の地涌の菩薩達を呼び寄せ、寿量文底の妙法蓮華経を付嘱し、末法の世に弘宣することを託すためだつたのです。

しかも末法は釈尊の化導とは無縁の、本未有善、三毒強盛の人々の充滿する時代であり、これを教化するには、下種と折伏逆化という布教方法を用い、正直に方便を捨てて、猶予なく、直ちに妙法蓮華経の受持を勧めるといふものです。煩惱の病で重篤に陥つた衆生を救うには如意宝珠や大良薬にも喩えられ、三世の諸仏の一切の功德の収まつた妙法蓮華経を直ちに服さしむ他はなく、上行等の地涌の菩薩に付嘱して、末法は一切衆生に妙法蓮華経の本尊を弘宣するという未来記が法華経の主たるテーマでもあつたのです。

右のゴチック体で引用した部分が、いわゆる「四十五字法体段」と称される部分です（テキスト43頁）。法華経本門の釈尊在世の、浄化された仏国土世界、つまり熟益脱益・本果妙の教主釈尊を中心に、一念三千の法界を示す経文の根拠として、一妙日導・優陀那日輝・清水龍山・山川智応その他、著名な学者が「己心の三千具足」等をめぐつて法界周遍の一念とか、仏果々上の一念、あるいは信心の一念等と百家争鳴の觀を呈している本抄の要文であります。

これについて、日蓮宗他門では、もともと教相上の教主釈尊

を本仏・本尊とする立場ですから、その解釈は本宗と大きく異なつてきます。たとえば、

「其の本尊の爲ていつらく体、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華経の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏、釈尊の脇士上行等の四菩薩、文殊弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如し。」（全集二四七頁）

これは、大聖人が觀心の本尊の相貌について頭わされたところです。この要文を見て我われはすぐ曼荼羅本尊のことだとわかります。だいたい本宗では「本尊」といつたら宗祖以来、曼荼羅本尊にきまつております。日興上人の遺著『白蓮弟子分でしぶん与もつしあたう申御筆御本尊目錄事』の存在が示すように、弟子檀越等が大聖人へ御本尊授与を願う場合は、日興上人の「申し与あたう」つまり日興上人の認定と取り次ぎ申請によつて授与されたことを物がたつております。しかも、被授与者（願主）の亡き跡までも御本尊の帰属に関与している事實は、御本尊は私物に非ず、公物として当初から大切に護持されたのではないのでしょうか。したがつて、曼荼羅本尊の書写、扱い、相伝等、日興上人の門下と鎌倉方といわれた老僧方の意識の差は、五人所破抄を引くまでもなく大きなものがあつたのです。

『富士一跡門徒存知事』には次のごとく録されております。

「日興が云く、聖人御立の法門に於ては全く絵像・木像の仏・菩薩を以て本尊と為さず。唯御書の意に任せて、妙法蓮華経の五字を以て本尊と為すべしと。即ち御自筆の本尊是れなり。」

それは現代にまで及んでいて、他門下を見ますと、関西では  
 釈迦・多宝・四土・四天等一塔兩尊四土四天等諸尊という、曼

茶羅本尊の諸尊を造像し、本  
 堂の本尊としておりますが、  
 久遠実成釈迦牟尼如来などと  
 称しても造像の印相や儀軌が  
 ないため、小乗教の教主だつ  
 たりします。関東では池上本  
 門寺や堀之内妙法寺など本堂  
 より祖師堂が中心になってお  
 り、お寺の実態としては庶民  
 の日蓮信仰によつてささえら  
 れております。また、鬼子母  
 神、大黒、稲荷、七面、三十  
 番神、中山流祈禱など、雑乱  
 勧請の弊風は永く一宗を覆つ  
 ており、教義と実際の信仰形  
 態において大きな乖離があ  
 り、「正直捨方便」の日蓮門  
 下には有りうべからざる異様  
 な光景が見受けられます。

本抄では「宝塔中の真ん中  
 には妙法蓮華經、その左右に  
 釈迦牟尼仏・多宝仏、釈尊の脇  
 士上行等の四菩薩・」。」



一塔兩尊四土像 茂原市指定文化財（平成28年11月25日指定） 所有 藻原寺

康永元年～2年（1342年～1343年）にかけて、兩尊像、四菩薩像、題目宝塔の順に製作され  
 た。（茂原市のホームページより）

とあるように、釈迦・多宝は妙法蓮華經の脇士として連なつて  
 おります。これを日蓮宗の人たちが見ると、妙法蓮華經を見落  
 として「釈尊が本尊と書かれているじゃないか」となる  
 のです。

もともと日蓮大聖人は立教開宗以来、妙法蓮華經を本  
 尊としておられたのであり、

「仏滅後・二千二百二十余年が間、迦葉・阿難等・馬鳴  
 ・竜樹等・南岳・天台等・妙楽・伝教等だにも・いまだ  
 ひろめ給わぬ法華經の肝心・諸仏の眼目たる妙法蓮華經  
 の五字・末法の始に一閻浮提にひろまらせ給うべき瑞相  
 に日蓮さきがけしたり」（種種御振舞御書）

との例にも見られるように、妙法蓮華經の五字を「法華  
 經の肝心」「寿量品の肝心」「三世諸仏の眼目」などと  
 形容され、仏法中、最極の要法とされております。

思うに、大聖人三十二歳で立教開宗の頃、鎌倉・松葉  
 ケ谷草庵や下総・富木氏の持仏堂には釈尊像が祀られて  
 いた可能性が大で、そこで天台大師講を中心に講会が開  
 かれていたことでしょう。その後の度重なる法難、とり  
 わけ龍の口と佐渡法難を経て、法華經身読という余人に  
 はマネのできない独自の宗教体験は、必然的に、法華經  
 の行者日蓮、上行菩薩再誕の御自覚という新たな展開を  
 生んで、一切衆生の蘇生をもたらす新たな法華信仰が生  
 まれ、妙法蓮華經の御本尊が図顕されるに至りましたか  
 ら、旧習に囚われた人々が、仏像造立にこだわったのも、  
 こうした物心両面にわたる急激な改革を受けとめられな

かつたためともいいうるのではないでしようか。

このところが全く日蓮宗と本宗日興門流の捉え方の違いであつて、本宗が一幅の曼荼羅以外に本尊としないことは、そこに日興上人以来、大聖人から受けついできたところの厳格な法義の受け止め方があるのです。

《教主釈尊を本尊とすべし》

もちろん一方では、

「教主釈尊を本尊とすべし」(「報恩抄」全集三二八頁)

との御書もありますし、釈尊が一切衆生の主・師・親であるという御書も数多くみられ、うっかりすると本果妙の教主釈尊を本尊とする説に惹かれかねません。これは私たち末法の一切衆生の大導師がどなたであるかという帰依の仏の問題でもありません。釈尊を論ずるなら、まず御書に説かれる教主釈尊には多義あります。三蔵教の教主釈尊(劣応身)、これは歴史上に存在した方です。次いで通教の教主(勝応身)、華嚴経や別教の教主(他受用報身)、迹門の教主(応即法身)、在世本門の教主釈尊、久遠元初(自受用報身)本因妙の教主釈尊の六種の教主釈尊を寛師は挙げておられます。

報恩抄で云う本尊とすべき教主釈尊とは、人と法の本尊を定めるに当たり、天台宗や日蓮宗などが立てる久遠実成の教主釈尊と同種の応仏昇進、本果妙、脱益の仏ではなく、久遠元初本因妙の自受用身の教主釈尊であり、日蓮大聖人の己心中に受持されてきた寿量文底の事の一念三千、人法一箇の本因妙の教主

釈尊即日蓮大聖人を本尊とすべしと解釈できます。

《本尊問答抄Ⅱ釈迦を本尊とせず》

その傍証として「本尊問答抄」には、

「問ふて云く、末代悪世の凡夫は、何物を以て本尊と定むべきや。答へて云く、法華経の題目を以て本尊とすべし。」

(全集三六五頁)

とあつて、明確に書き置かれております。これを無視して日蓮宗の人々は釈尊像を本尊としているのです。同じく、

「上に挙ぐる所の本尊は、釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊、

法華経の行者の正意なり。」(同)

とは、日蓮大聖人が上に挙げるところの滅後末法の末代の衆生が何を本尊とするべきかについては、釈迦の御本尊、多宝の御本尊、十方の諸仏菩薩の御本尊、法華経の行者(大聖人)の御正意だということです。

よく考えて見れば、熟脱の教主釈尊の化導は正法・像法を過ぎて末法に入った今はその使命を終えて地涌の菩薩に譲られたのですから、今さら、釈尊とその教法を行じてみても、去年、去々年の暦に等しいのです。

そこで、原点に返って五百塵点劫の最初成道時以前、我本行菩薩道と記された釈尊の本因修業時代に受持した妙法蓮華経の御本尊を、末法の今も御本尊とするという意味なのです。

これは明瞭にそういう意味で書いてあるのです。決して釈尊が本尊だと言っているのではなくて、釈尊は本尊

じゃないんだと。滅後末法においてはすでに白法隠没で効力を失っているんだから、そのためにわざわざ上行等の四菩薩を呼び出して妙法蓮華経を譲ったではないか、ということになるのです。また、

「答ふ、彼等は仏を本尊とするに、是れは経を本尊とす。」

(全集三六六頁)

ともあります。経を本尊とするとは、妙法蓮華経を御本尊とすることと同意で、釈尊を祀る日蓮宗の本尊観とはこのところ

が全く違うのです。仏像をいくつならべても、事の一念三千の妙法蓮華経をあらわすことはできません。しかも仏像を立てれば、自受用報身や

無作三身などの仏身は表現できず、三十二相八十種好の色相莊嚴では別の仏身となりません。まして本堂の須弥壇上に密集して並べられた姿は、虚空会の説相とはほど遠く、違和感を覚える人も多いのではと思います。

一旦、仏像として安置されれば、象徴とは違つて、リアルな物だけに、良くできている



仏像彫刻専門店のホームページに掲載された一塔両尊四士

とか、駄作であるとか、経年劣化が甚だしいとか、世俗的なイメージが起こり、古びたものであるとか、掃除や給仕はどうしているのかなどの雑念を引き起こすことになるのではと想像します。もともと文字でしか表せない下種益、久遠、自受用報身、本因本果、一念三千などの概念も表すことも不可能である上、釈迦如来の印相を取り替えて阿弥陀仏にした話などを聞けば、造像を用いなかった理由の一端が見えるような気がします。

勿論、本抄の、

「在世の本門と末法の始は一同に純円なり。但し彼は脱、此れは種なり。彼は一品二半、此れは但題目の五字なり。」

のごとく、宗祖と釈尊の仏法に種脱の相違があることが最大の理由ではありましようが。また、

「汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして、法華経の題目を本尊とするや。」(同)

これほど明瞭な文言はないと思うのです。日蓮大聖人に向かつて質問・疑問として、あなたはなぜ釈迦を本尊としないで、法華経の題目を本尊としているのかとの問いに対して、大聖人の答えは、

「末代今の日蓮も、仏と天台との如く、法華経を以て本尊とするなり。」(同)

とされています。

こんなに明らかに、釈尊の仏像を本尊とするのではない、曼荼羅の妙法蓮華経、一念三千の本尊を本尊とするのが大聖人の建てられた前代未聞と自負する宗旨だと仰せられているのです。心肝に染めたいものです。

(了)

〔御書と日興上人（一九八）〕

「立正安国論」書写と「安国論問答」（一三二）

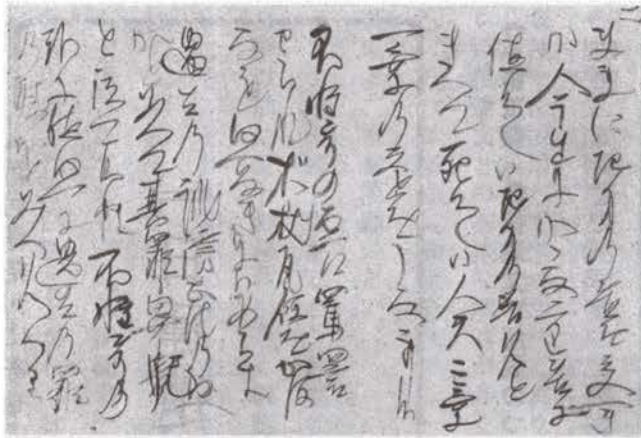
松田 銘道

前回は、大黒喜道師が「宗祖ご一代における妙法五字の内容的な変容について」（『興風』三〇号）との論文で、「妙法五字」について、「外見の形は同じ」でも「内実はさまざまに変わっていった」との考察に関して、「三、本門という重要素。理から事へ」との項目についてみてきました。引き続き同論文についてみていきます。

「四、竜口法難でもたらされた『日蓮』不軽菩薩の自覚に伴う要素の付加」との項目では、宗祖の不軽菩薩の自覚について、「文永八年（一一七二）九月の竜口法難前後の宗祖にもたらされた『法華弘通に励む行者・日蓮に諸天の加護がなく、諸難に遇い続けるのはなぜか』という一大疑問を氷解させたのは、その不軽

品の「其罪畢已」の四字であった。これは「その罪を畢え已って」と読み下す偈文で、不軽菩薩自身にも過去世に「法華経」を誹謗した罪があり、その罪を心根よからぬ人びとから受ける悪口罵詈や杖木瓦石をよく耐え忍ぶことによつて消滅し、その罪がすべて無くなった時にはじめて「法華経」を聞いて、六根清浄の功德を示す一偈である。そして、宗祖はおそらく竜口の頰の座において、この不軽菩薩が過去謗法の罪障を忍難弘経の功により消滅させた姿（『其罪畢已』）を自己の姿と同一と見て、『日蓮』不軽菩薩の自覚を得られたものと想定される。」との見解を示しています。ここに指摘の『法華経』「不軽品第二十」の「其罪畢

已」との一文に宗祖が注視されたのは、竜口法難の翌月、佐渡に出発五日前の『転重軽受法門』（文永八年（一九七一）十月日日・真蹟現存）に、「不軽菩薩の悪口罵詈せられ、杖木瓦礫をかほるも、ゆへなきにはあらず。過去の誹謗正法のゆへかとみへて「其罪畢已」と説かれて候は、不軽菩薩の難に値ふゆへに、過去の罪の滅するかとみへはんべり（は一）。」と引用されたのが嚆矢となりますが、翌年二月、佐渡での『開目抄』（真蹟曾存）にも、「有る人云く、当世の三類はほぼ有るにいたり。但し法華経の行者なし。汝を法華経の行者といはんとすれば大なる相違あり。（中略）答へて云く、汝が疑ひ大いに吉し。ついでに不審を晴さん。（中略）不軽品に云く「其罪畢已」等云云。不軽菩薩は過去に法華経を謗じ給ふ罪、身に有るゆへに、瓦石をかほるとみえたり。」と引用があり、その翌月、三月二十日の『佐渡御書』にも、「世間の愚者の思ひに云く、日蓮智者ならば何ぞ王難に値ふ哉なんと申す。



『転重軽受法門』(真蹟八紙完、中山法華經寺蔵)。

法華經の行者がなぜ大難に値うのか、その理由を『涅槃經』の「転重軽受」の法門から示された書状。宗祖は「転重軽受」の事例として、不輕菩薩が四衆から惡口罵詈、杖木瓦礫等の難を受けたこととの関連に、「其罪畢已」の一文を用いられるとともに、自らの受難の意義をそのご文に求められた。

の罪があり、それ故今生に『般泥洹經』に示される八種の罰を受けるのであるが、それは転重軽受として、本来地獄に墮ちるところを、軽い罰を受けることによって過去法華經誹謗の罪を消すのであり、まさに法華經弘通の功德であるとして示している。これらは『開目抄』の説示と共通する。さらにこの年二月十一日の二月騒動に触れ、これはかつて予言した自界叛逆難に他ならず、鎌倉政権はこうした国難を克

日蓮兼ねての存知なり。(中略) 日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず。不輕品に云く「其罪畢已」等云云。不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈打擲せられしも先業の所感なるべし。」と引用があります。

以上の三書では、いずれも法華經の行者が「大難(二竜口法難・佐渡流罪)」に値うことへの疑難に対し、過去世における謗法の罪障を消滅するとの「転重軽受」の法門との関連から、不輕菩薩の事

例として「其罪畢已」の偈文が引用されています。

『佐渡御書』は真蹟及び上代の写本も伝わりませんが、山上弘道氏の『日蓮遺文解題集成』(令和五年三月日)では、

「本書の内容は、第一に撰受・折伏は時により使い分けられるべきで、今末法は折伏の時であるから、権力を恐れず『法華經』を強説すべきであると、折伏正意が示されている。第二に、自身不輕菩薩のごとく過去に法華經誹謗

服するために、日蓮を棟梁・眼目・父母と頼むべしと述べている。最末には日蓮の折伏強説を批判し、穩便に弘通すべしと主張する弟子の存在を示した上で、分を弁えぬ愚説であると一蹴している。この件に関しては後年弘安三年十二月の『諫曉八幡抄』にも、同様な記述が見られる。(中略) 右のごとく本書は、『開目抄』の主張の要約的意味合いと、それ以降に惹起した二月騒動を踏まえ、予言の中による新局面の到来を門下に周知させるために著されたものと思われる。」

と、記述内容が『開目抄』等と関連していることなどから、「第I類 真撰遺文」に収録し、真撰遺文と規定しています。さて、大黒師は、「其罪畢已」の引用から宗祖が不輕菩薩の自覚を深められたことが想定できるとし、その自覚に伴い、妙法五字の内実には、

- ① 「順縁から逆縁への転換」。
- ② 「熟脱ではなく下種という要素」。
- ③ 「末法の本尊という要素」。

以上の三つの要素が付加された、との見解を示しています。(続く)

《新刊書発刊に寄せて》

# 『日蓮遺文解題集成』発刊余話 〈最終回〉

興風談所 山上弘道

## 《「第三類 偽撰遺文」解説のつづき》

前回、偽撰遺文と判断する要素について述べたが、今回はその具体例を幾つか示し、本稿を閉じることとする。

### ○最蓮房関係偽撰遺文群

最蓮房が対告者となっている遺文として、まずあげなければならないのは『立正観抄』と『立正観抄送状』である。『立正観抄』に対告者の記述はないが、同送状の宛名が「最蓮房御返事」であり、最蓮房宛であることがわかる。そしてこ

の二編は身延山久遠寺三世日進が正中二年（一二三四）に筆写した写本が現存している。大聖人滅後四十四年の写本であり、それ故にこれまで真撰遺文と評価される傾向にあったが、近時池田令道師により、本抄において破折されている「止観勝法華説」が、大聖人滅後に比叡山において松林房政海によって創唱されたものであることが判明したことから、日進および日進周辺で偽撰された可能性が高いことが指摘報告されている。

遺文が十三編存する。その成立は必ずしも同所・同時期ではないと思われる、かなり時代が下がると推測されるものもあるが、今回は以下に、右二書とほぼ同時期に、最蓮房の实在を示すために作成されたと思われる『生死一大事血脈抄』『最蓮房御返事』『得受職人功德法門抄』の三編を紹介する。

まず『生死一大事血脈抄』であるが、その奥に「文永九年<sup>壬申</sup>二月十一日 最蓮房上人御返事」との日付けと宛名が見られる。偽撰遺文たる決定的根拠として

は、末法上行出現思想が見られることで、それは翌文永十年四月の『観心本尊抄』によつて、はじめて宣言されるものなのである。

さて同抄には「…：還て日蓮を種種の難に合せ、結句此嶋まで流罪す。而るに貴辺日蓮に随順し又難に値ひ給ふ事、心中思ひ遣られて痛ましく候ぞ。…：過去の宿縁追ひ来て今度日蓮が弟子と成り給ふ歟。」とあり、最蓮房は佐渡に流されてきた大聖人と邂逅してその弟子となつたとしている。そして最蓮房の生死一大事血脈についての質問に対し、「只南無妙法蓮華經、釈迦多宝上行菩薩血脈相承と修行し給へ。」と返答している。

次に『最蓮房御返事』であるが、その日付は『生死一大事血脈抄』の二ヶ月後の文永九年四月十三日である。偽撰遺文たる決定的根拠としては、慈覚・智証が批判されていることで、真撰遺文で両者が合わせ批判される初見は、建治二年二月初旬頃に系けられる『種種御振舞御書』なのである。

そしてそこには「去二月の始より御弟子となり、帰伏仕候上は」「何となくとも貴辺に去る二月の比より大事の法門を教へ奉りぬ。」とあり、『生死一大事血脈抄』での法門伝授について述べており、両状は内容的に密接に関連している。

また本状五日前の四月八日に最蓮房に受職灌頂した旨が記されるが、これも重大な疑義で、真撰遺文による限り大聖人が弟子に受職灌頂した形跡は全く見られない。

そして「夕さは相構へ相構へて御入候へ。得受職人功德法門委く御申し候はん。」と、最蓮房に対し得受職人功德法門を委しく教えるので来臨するよう要請している。

なお本状では、最蓮房が京都の出身であることも伝えられている。

次に『得受職人功德法門抄』であるが、日付は文永九年四月十五日で、右要請により翌々日に大聖人を訪問し、受職灌頂の功德を重ねて聴聞し、「日浄」との日号が授与されている。

以上の三編に見られる最蓮房の行状を整理すれば次のようになる。

——最蓮房は元京都在住の僧で、何らかの理由で佐渡流罪となつて佐渡に住していたところ、文永八年十一月一日佐渡塚原に到着された大聖人と邂逅し弟子となり、文永九年二月には『生死一大事血脈抄』によりその法門を伝授され、その後四月八日に受職灌頂を受け、『最蓮房御返事』での要請によつて大聖人を訪れ、受職灌頂の法門を聴聞し日浄との日号を授与された。

さてではこれら最蓮房の行状を示す偽撰遺文作成の目的は何であつたろうか。すぐに想起されるのが、最蓮房宛『立正観抄』およびその送状たる『最蓮房御返事』の存在である。この二書偽撰に際しては、富木常忍や四条金吾など実在の有力量越苑とするのではなく、最蓮房という真撰遺文に見られない人物が対告者とされた。その場合どうしても最蓮房の実在を示す必要性が生じてくる。つまり右三編はその行状を具体的に示すために、

偽作されたと推測されるのである。

### ○『三世諸仏総勘文教相廃立』

#### 関連偽撰遺文群

『三世諸仏総勘文教相廃立』（以下『総勘文抄』）が偽撰遺文と判断される最大の要因は、その内容が、中古天台文献である『止観勘文』『自行略記』『自行略記註』の文を大量に使用し（主要部分の「自行の法」を述べる段では文章の三分の一に相当）、しかも出典を示さず、文章を微妙に変えて使用するという、盗作といわれても仕方ないその制作態度にあり、大聖人の真撰遺文とは到底認められない。

またその論旨も、当然ながら中古天台本覚思想の影響を強く受け、凡夫たる我が身心こそ三身即一の本覚如来である故に体であり、十方の諸仏はその衆生の一念心から顕れた迹であるという、凡夫本仏・凡仏逆転の思想が展開されており、これは常の大聖人の、妙法受持による一

念三千・凡夫成道論とは著しく乖離している。

また『華嚴経』の引文も、「華嚴経云ク心ハ如ク工ナル画師ノ造ルカ種々ノ五陰一切世間ノ中ニ無シ法トシテ而不レ造ラ。如レ心ノ仏モ亦爾ナリ。如レ仏ノ衆生モ然ナリ。三界唯一心ナリ。心ノ外ニ無シ別ノ法」。心仏及衆生是ノ三無シ差別。已上」とあって、本来同経にない「三界唯一心 心外無別法」の文が挿入されている。これは安然の『教時義』『菩提心義抄』あたりを嚆矢とし、その後中古天台文献たる『本理大綱集』『観心略要集』『自行略記』『断証決定集』『修禅寺決』等に頻出するものである。そして当然のことながら大聖人の御真蹟が完存する『八宗違目抄』や『天台肝要文集 上』での、同箇所引文にはその文言は見られない。

かくて本抄は偽撰遺文と判断されるのであるが、以下にその安直な制作態度や、凡仏逆転など本覚思想に影響を受けた法義内容、そして使用する独特な用語の共通性から、関連して作成された可能性が高い偽撰遺文を幾つか紹介しよう。

まずは『十如是事』である。同書は恵心仮託の偽撰書『法華即身成仏要記』を、引用ではなく文章を改竄しつつ同書の骨子として依用しており、その手法が『総勘文抄』の場合と共通している。

さらに用語の共通性として、『総勘文抄』に「皆悉ク妄想ノ僻目僻思立所ニ散止シテ……」、「我身ヲ思フ生死ノ凡夫ナリト時ハ如シ夢ニ成ルカ蝶ト 僻目僻思ナリ。」とある「僻目僻思（ひがめひがめい）」の用語が、『十如是事』にも「只今までみづる所の生死妄想の邪思（ひがめい）、ひがめの理はあと形もなくなりて、」、「ひがめ思の妄想は昨日の夢を思ひやるが如く、」と使用されている。

また『総勘文抄』に「髮筋ヲ切ル程ニ見テ過去現在未來ノ三世ノ虚夢ヲ也。」とある「髮筋」の用語も、『十如是事』に「かみ（髪）すぢ計の法もなき物を、……」と使用されている。

注目すべきはこれらの用語は、実は『総勘文抄』が依用している『自行略記註』に見られるものなのである。

さらに教義内容について見ると、『総勘文抄』にて「是<sub>レ</sub>經ニ説テ云ク。如是相（応身如来）、如是性（報身如来）、如是体（法身如来）。此<sub>レ</sub>云フニ如是ト。此三如是、本覚ノ如来ハ十方法界ヲ為シ身体ト十方法界ヲ為シ心性ト十方法界ヲ為シ相好ト。是ノ故ニ我身ハ本覚三身如来ノ身体也。」と、三如是を三身に配し、我が身は本覚の三身如来と述べるのが、『十如是事』に「されば此三如是を三身如来とは云フ也。此三如是が三身如来にておはしましたるを、よそに思ひへだてつるが、はや我身の上にてありける也。……されば我身が頓（やが）て三身即一の本覚の如来にてはありける事也。」と述べるのと共通している。

そしてこの三如是を三身に配し、我が身本覚の三身如来とする独特な思想は、『法華即身成仏要記』に見られるものである。

次に『万法一如抄』である。同抄も『十如是事』と同じく『法華即身成仏要記』と深く関連している。同抄には「若し捨ると云はば、是<sub>レ</sub>万法一如の

謂れ更に闕減して、法華の大旨破壊しなん。」、「此ノ依正の二法無<sub>レ</sub>闕減ニ只我等衆生の一念に具足したりと云フ処を、万法一如とは云フ也。」とあり、棒線部分の「万法一如」が同抄の書名の所以ともなっているのだが、これは『法華即身成仏要記』の「仍三諦直ニ三身、故ニ万法一如ニ無<sub>レ</sub>闕減ニ」の文によつていると思われるのである。

また双方に見られる波線「闕減無く」の文言であるが、これは真撰遺文には全く見られず、一方偽撰遺文たる『総勘文抄』『総在一念抄』『得受職人功德法門鈔』『当体義抄』『放光授職灌頂口伝』『今此三界合文』等に頻出する用語である。中でも『万法一如抄』では四回使用されており、おそらく『法華即身成仏要記』から『万法一如抄』へ、そしてそこから『総勘文抄』等他の偽撰遺文へと伝染使用されていったものと推測される。この件に関しては『解題集成』『付録』（二一五・二二一頁）参照。

次に『一念三千法門』である。まず思

想的には、三如是を三身に配し、我が身は本覚の三身如来と述べるのが、『総勘文抄』『十如是事』等と共通し、ことに『十如是事』とは共通する文章が以下のように見られる。

・『一念三千法門』

「此三身如来全く外になし。我身即三徳究竟の体にて三身即一身の本覚の仏也。是をしるを如来とも聖人とも悟とも云フ。不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>凡夫とも衆生とも迷とも申ス。」

「譬へば春夏田を作るに早晚（わせおく）あれども一年の中には必ず納<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>。法華の行者も上中下根あれども、必ず一生の中に証得す。」

「此妙法蓮華經ト者我等が心性、総じては一切衆生の心性八葉之白蓮華の名也。」

・『十如是事』

「されば我身が頓（やが）て三身即一の本覚の如来にてはありける事也。是をよそに思<sub>レ</sub>を衆生とも迷とも凡夫

とも云フ也。是を我身の上と知りぬるを、如来とも覺(さと)りとも聖人とも智者とも云フ也。」

「譬へば春夏田を作りうへつれば、秋冬は蔵に収めて心のまゝに用ふるが如し。……秋のいねには、早(わ)せ)と中(なか)と晩(おく)との三のいね有れども、一年が内に収むるが如く、此も上中下の差別ある人なれども、同く一生の内に諸仏如来と、一体不二に思合せてあるべき事也。」

「妙法蓮華經の体のいみじくおはしますは、何様(いかよう)なる体にておはしますぞと尋出してみれば、我心性の八葉の白蓮華にてありける事也。」

以上『総勘文抄』『十如是事』『万法一如抄』『一念三千法門』は、同人もしくは同グループによって、互いに関連し合つて作成された偽撰遺文と判断されるのである。

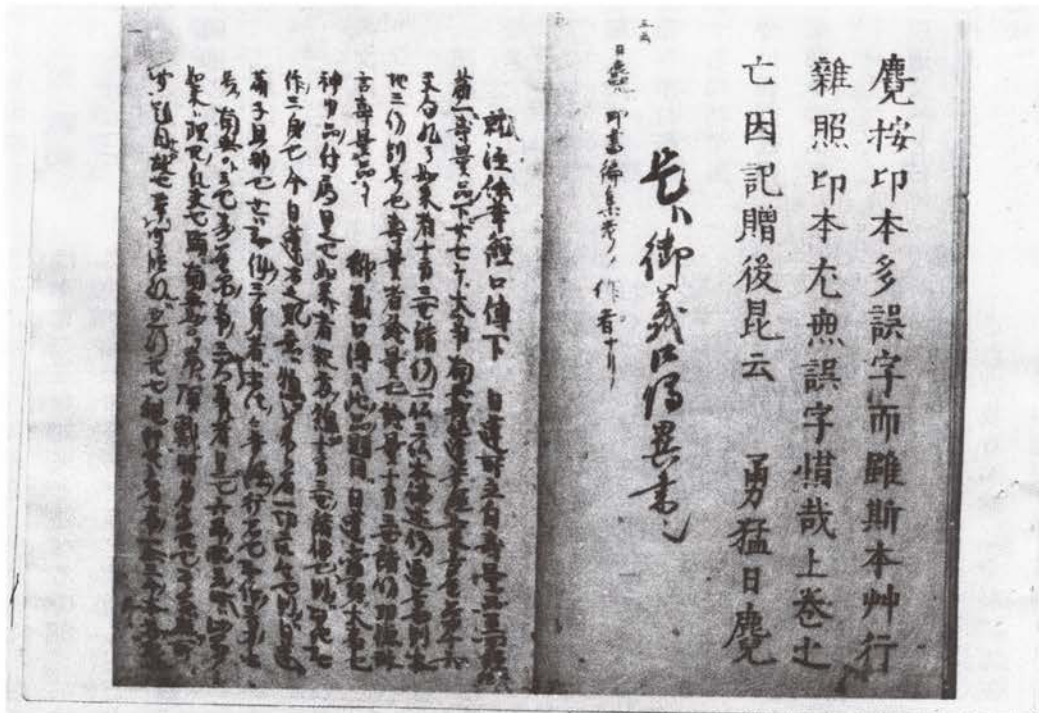
○『御義口伝』

『御講聞書』

『御義口伝』は大聖人の講義を日興上人が記したものとして伝来するたため、ことに日興門流で珍重されてきた法義書である。『御講聞書』も同じく大聖人の講義を日向が筆記したとされ、内容や用語が多く共通し、姉妹編と見られている。

しかしこの両書は、円明日澄(一四四一〜一五〇一)が文龜三年(一五〇三)に浄書完成させた『法華啓運抄』に大量に引文されるのが文献的初出であり、それ以前にはその名前すら全く見られないものである。

『御義口伝』を偽撰遺文とする根拠は枚挙にいとまがないが、決定的な疑義と



『御義口伝 下』大石寺蔵

して、大聖人滅後に成立した必昇撰『科註妙法蓮華經』が引用されていることがあげられる。また識語には、大聖人の講義は弘安元年正月一日であったと記されているが、大聖人はその前日建治三年の大晦日に、突然の下痢を伴う腹痛に襲われたことが、『中務左衛門尉殿御返事』に述べられており、翌日にこのような大がかりな講義が行われる状況ではないことも、大いなる疑義である。内容的にもその序文は殆んど偽撰遺文たる『当体蓮華抄』を依用して作成されており、他にも偽撰遺文との密接な関連が多く見られる。その詳細は『解題集成』(一〇五〇頁以下)を参照願いたい。

さてその成立であるが、前述のように日澄以前にはその存在が全く確認されないこと、それが突然日澄『法華啓運抄』に、「御義云く」としてなんと九十八回も引用されており、『御講聞書』も二十九回引用されていることから、日澄周辺

で作成されたと見るのが自然であろう。ちなみに日澄は他にも『船守弥三郎許御書』『十一通御書』等多くの偽撰遺文を作成しており、そのことも日澄周辺成立説を補完していよう。

余談となるが、私の父山上三郎は、生前『御義口伝大綱』と称する同書の解説書の出版を志していた。それは終に成し遂げられなかったが、その父がもし生きていたなら、『御義口伝』を偽撰遺文と規定する息子に、何というだろうかと思うことがある。「バカモン」と一喝して来るかもしれないと思う反面、遺文研究はここまで進展してきたのだな、と喜んでくれるのではないかと、勝手ながら思っている。

### ○「偽撰遺文学」確立への提言

さて偽撰遺文について述べてきた締めくくりとして、これはここ数年提唱してきたことであるが、ここに改めて「日蓮偽撰遺文学」の確立を提言しておきたい。

大聖人の思想を正確に拝する上で、真偽の判定は最も重要で不可欠な作業である。しかしその結果偽撰と判断された遺文は、けっして負の産物としてのみ捕らえるべきではない。偽作されるにはそれなりの理由があったはずであり、その背景をできる限り追求し精査することによって、その当時日蓮門下がどのような問題を抱え、どのような議論を展開し、どのようなことを指向していたか等々、貴重なことがらを知ることができるのである。

今後私なりに、『解題集成』にて偽撰遺文と判断した一四五編について、さらに様々な観点から研究の歩を進めていきたいと思う。

さて五回にわたって書き連ねた「日蓮遺文解題集成」発刊余話」は、今回をもって終了する。多少難しい内容となったが、今後の遺文研究の進展を願うことと、ご寛恕願いたい。さらなる精進を自身に課しつつ擱筆する次第である。

## 【所感発表】

## 姉と御本尊様のきずな

大阪地区 井上 真理

本日は、第五十二回源立寺法華講総会、誠におめでとございます。

私は、大阪地区の井上真理と申します。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

さて、私の姉弟は、上に姉、下に弟四人の六人なのですが、本日は、十年前に亡くなった姉のことをお話しさせていただきたいと思えます。

私の両親が、創価学会に縁して日蓮正宗に入信したのは、昭和三十年十二月、私が五歳の時で、その入信は直接的には創価学会による折伏だったので、私にはそれとは別のことが遠因となっていたのではないかと、大人になって振り返ると思えるのでした。

といいますが、後に母から聞いた話

なのですが、母の祖父母は長崎県壱岐の島に住んでおり、明治か大正時代のことと思いますが、その当時来島して布教演説をしていた日蓮宗の僧侶の話が祖母が聞いて感銘を受け、家に帰ってとても良い話だったと祖父に話したことで、その僧侶に家に来てもらって祖父も説法を聞き、そのことがきっかけで、その頃、壱岐の島には日蓮宗の寺院が無かったことから祖父は発心して、自力で「霜田寺」というお寺まで建てたということがあったそうです。

その話を私は母から聞いていましたので、一度その寺を訪ねてみたいとずっと

思っていたのですが、それが叶い十二年前に、霜田寺を訪ねました。

そして、当時の霜田寺の住職より話を聞いたところ、祖父は四代目の住職もしていたそうです。母からは住職をしていたという話までは聞いておりませんでした。寺の住職をする人がいなかったからかもしれません。

そのような経緯がありましたから、母は壱岐の島に住んだことはありませんでしたが、もともと日蓮という人とその教えに縁を感じていて、少なからず親しみを持っていたのではないかと思ったのです。

その母が、直接創価学会に入信するきっかけとなったのは、次男の出産だったようです。二男は、生まれた時、全身が紫色で、医師からは、「万が一助かっても知的障害が残るから、助からない方がいいのでは」と告げられたそうです。しかし、母はせめて命だけでも助けたいと

の一心、その緊急性と、当時創価学会から入信を勧められていて、学会に入信すると初信の功德があると聞かされていたこと、またそれに祖父の日蓮宗改宗の因縁もありましたから、同じ日蓮さんだったら創価学会でもいいのでは、と考えて入信したのでした。

幸い二男の病気も無事治り、障害も残らなかったことを、母は初信の功德はすごいと思いい、以後、創価学会を脱会するまでは、学会活動に没頭、邁進してしました。

さて、本題に戻りますが、姉は、私は年子なので一学年上なのですが、その姉は幼少の頃より、他の子供とは違っていました。当時はよく分かりませんでした。が、今振り返って思えば、「ADHD（注意欠陥・多動性障害）」、いわゆる発達障害だったのではと思っております。まだ一万円札の無かった時代に、姉は何に使うわけでもないのに家から千円札

を持ち出したりして、母が慌てていたのを思い出します。夜になると、家の近所の公園の土管の中で寝てみたり、貸本屋から漫画本を借りても返却することもな



所感発表をされる井上真理さん

く、本屋さんがたびたび追加料金を集金に来ていました。

娘になってからも、今では町を歩けばよく見かけるので気にもなりません。が、当時は髪を金髪にしている人など見かけ

ない時代に、姉は金髪にしてパチンコ屋通いをしていました。そのパチンコ屋で、姉は小柄なので子供に見られたのだと思います。が、店員から声を掛けられ、店の奥へ連れて行かれて、年を尋ねられたこともあったそうで、本人はとても憤慨しておりました。

また、当時サラ金が流行していたのですが、知り合いの者同士がお互いに保証人になり合うということが横行しており、結局姉は一千万円以上も借金をさせられてしまったというようなことが二度もあつたのですが、本人には罪の意識も返す気もなく、催促がひどくなると行方不明になってしまいました。

また、二男の嫁を言いくるめてマンションの保証人に仕立て、家賃を何年間も滞納し、とうとう二男のところに裁判所から呼び出しがあり、二男も驚いて私に相談に来たことがありました。

私は裁判所からだから、必ず出て行く

ように言いましたが、その結果、三百万円以上の家賃滞納で、裁判所から期日を決められ、明け渡すようにとのことで、二男が勤め先のトラックを借り、決められた日に荷物を運び出したということもありました。

姉は、その後しばらく音信不通でしたが、ある年末、くも膜下出血で入院していると連絡がありました。その時は誰も見舞いには行きませんでしたので、その翌年のお正月に、源立寺に参詣して、家族で顔を合わせた時、母と長男に、一度病院をのぞいて見てはどうかと話して行ってもらったところ、姉は三・四日前に手術を終えたばかりだったそうなのですが、何処へ行ったのか、病院を抜け出していたそうで、医師からもすぐ連れ戻すように言われたのですが、誰も何処へ行ったか分からず仕舞いでした。

それから多々、いろいろなことがありましたが、さすがに両親も年老いたこ

とから、姉にはもう何もしてあげられない旨を申しつけたそうです。

その後、姉の夫である人が、大阪市内から豊中市に引っ越したと聞きましたので、私が訪ねましたら、姉が家に帰らないので、職場の近所の豊中市岡町に引っ越したということのようでしたが、しばらくしたら姉が引っ越し先の家に転がり込んできたそうです。後から思うと、その時にはすでに姉自身が病に冒されていたことを知っていたかもしれません。

晩年は、肝臓がんになったのですが、多分、病院にも掛かっていなかったのではないかと思います。

そんな姉でしたから、一応子供の時に御授戒は受けていて、何度か源立寺へは母と一緒に参詣したこともあったようですが、信心などしているはずがないと、私は勝手に思い込んでいました。

姉が亡くなる三・四ヶ月前、四男のところに姉本人から電話があったそうで、

四男も最初はお金の無心だろうくらいに思っていたそうですが、姉を訪ねてみたところ、かなり病状が悪化していましたので、主治医に聞きに行ったところ、「何時亡くなってもおかしくない」とのことでした。がんは全身に転移しているとのことでしたが、姉の夫が借りていたのは、一人暮らしのつもりでしたから、狭いワンルームマンションで、その狭い部屋に寝たつきり状態です。

その狭い部屋に行って、四男が目の当たりにしたのは、御本尊様をお祀りしてある小さいお仏壇が設置されていたことでした。

四男は、思わず「あの御本尊様か」と聞いたのだそうですが、「あの御本尊様に決まっているでしょう。私が他に何を祀るの！」と、姉は怒って言ったそうです。

「あの御本尊様」とは、日蓮正宗の御本尊様ということなのですが、私たちは

姉が小さい時に一緒に御授戒を受けたことは知っていました。御本尊様を下附していただいていたことは、全く知らなかったからです。多分、母が持たせたのだとは思いますが……。

また、その仏壇には、ご仏飯もお供えしてあったそうです。四男は、その後姉が亡くなるまで、月一・二回のペースで姉の元を訪ねていたそうで、その度にお仏壇にはご飯が供えられており、驚いたそうです。

その話を、四男から聞いた私も、そのことが想像すらできませんでしたので、そこから姉の今までの行いは何であったのかと考えさせられ、不思議な思いがしました。そして、それまでの私自身が、いつも自分の我見だけで物事を見ていたことに、改めて思いました。

姉には、一人、娘がいて、その娘も母親には散々困らせられていましたので、

疎縁になっていましたが、母親との最後になると思いましたので、私と四男が、一度、見舞ってやるように娘を促したことで、病院に見舞ってくれたのですが、姉は、見舞いに来た娘を見て、はじめは「来なくてもよかったのに」とは、言わなかったのですが、突然の娘の見舞いを、すごく嬉しそうにしていたそうで、別れ際、「来てくれてありがとう」と、一言娘に言ったそうです。

そして、その別れが最後の別れとなりました。娘が病院を後にして、電車に乗った直後に、「今息を引き取った」と連絡が入ったそうです。それは、平成二十六年十一月十八日のことでした。姉の葬儀は、源立寺でお願いすることができました。

生前、姉が育児、洗濯・掃除等の家事をしているところを見たことがありませんし、いつも何処で何をしているのか、

家族の誰も分からず仕舞いという人でしたが、ご飯を炊いていたということだけは少し聞いていましたので、姉は臨終を間近にして、御本尊様の前にご飯をお供えし、端座してお題目を唱えたのでしようか。それも今となっては分かりません。葬儀の際、菅野ご住職より、

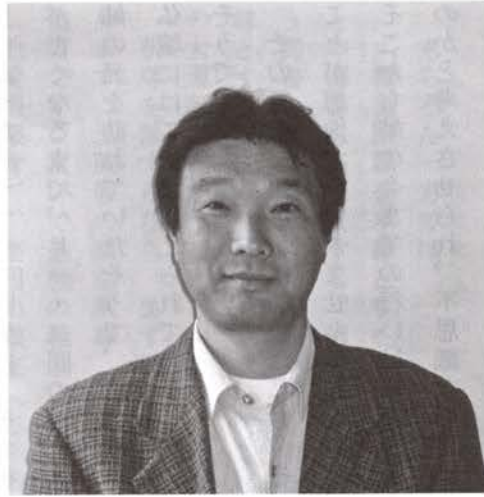
「安らかなお顔ですね」といっていただきました。

その一言で、私からすればハチャメチャな姉でしたが、不思議な因縁によって受けたその生を、最後に正法をもって変毒為薬できたように思え、私の心のつかえもスーッと取れていって、安らかに霊山浄土へと旅立ってくれたものと、私は固く信じてことができました。以上です。ご清聴ありがとうございました。

【読后感】

森永卓郎著『書いてはいけない』

大阪地区 森 秀之



森秀之さん

「二〇二三年十二月、ステージ四の  
ん告知を受けた。『命あるうち、この本  
を完成させ世に問いたい』私はそれだけ  
考えた。

私がテレビやラジオなど、メディアの  
仕事をするようになって四半世紀以上が

経過した。その経験のなかで、メディア  
では、けっして触れてはいけない『タブ  
ー』が三つ存在した。

- 1、ジャーニズの性加害
- 2、財務省のカルト的財政緊縮主義
- 3、日本航空一二三便の墜落事件

この三つに関しては、関係者の多くが  
知っているにもかかわらず、本当のこと  
を言ったら、瞬時にメディアに出られな  
くなるというオキテが存在する。

本書で私が行なうのは、現状を打破す  
るための告発である。もちろん大きなリ  
スクがあるのは承知だ。逮捕されるかも  
しれないし、命をねらわれるかもしれな  
いし、訴訟もおこされるかもしれない。  
それでも私は勇気を持つべきだと決断し

た。」

この文言を本書の帯に書かれているの  
をSNSで目にしたとき、私は特に日本  
航空一二三便の墜落事件について、一九  
八五年当時就職してものすごく忙しくし  
ていて自分の事で精一杯の時期でもあつ  
たが、その後の原因等の調査の中で、私  
は単純に墜落して発見されるのに十四時  
間も経過していることだけがおかしいな  
あと感じていました。その後二十年ぐら  
い前に青山透子著書「日航一二三便墜落  
の事実」で納得したことがあり、事実  
ならば日本政府は大変恐ろしい国だと思  
いだし、改めて興味を感じてamazonで購  
入した。

著者は経済アナリストの森永卓郎氏で  
す。前年に、著者が日本専売公社に入社、  
予算を握る財務省に「絶対服従」のオキ  
テを強いられるその経験を原点として  
「財政均衡主義」という教義のもとカル  
ト化する財務省に切り込んだ『ザイム真  
理教』を出版しベストセラーになってい

るにもかかわらず、大手メディアはほぼ取り上げることがなかった。

私は、幼少期から両親の影響で、創価学会の会合、出版物等による洗脳操作で育った物として、宗教II世問題等についてはある程度理解もできますし、その解決方法も時間経過と共に可能だと思いません。それとは別に、知らず知らずに、大手メディア、マスコミ、新聞社による、偏った情報操作に洗脳されているのが、殆どの日本国民ではないのかと感じます。

戦後GHQによる日本人愚民化政策プログラムに気付かせていただいたのも、創価学会のおかげかもしれません。

特に著者が言及するのは、日本高度経済を支えた取引企業間等の「株式の持ち合い」「不動産担保金融」の二本柱であった。失われた三十年の原因が、日航一



森永卓郎著『書いてはいけない』

二三便の墜落事件以降、それが米国の圧力により、米国の言いなりとなって旧大蔵省（財務省）の財政緊縮政策となって国民負担の増税政策となり、バブル崩壊、郵政民営化等、日本経済が没落し、最近ではLGBT法案や、今後NTT法案廃

止、パンデミック法案と移民政策と制定されると、今後日本人口は増えることはないで、制度・政策は米国、人は中国人や東南アジアの人々が移民して、現代のように日本人による国家が維持できなくなるのは目に見えていることです。正

信覚醒運動当初から、創価学会・宗門に

よる様々な弾圧を目の当たりにしています。それ以上に、国家、日本政府、大手マスコミ等で情報操作、言論統制は確実に行われています。それをさせているのは、現在はニューワールドオーダーと言われる欧米のグローバリスト（ウォール街）米民主党政権と言われています。

陰謀論のような内容ですが、それに中国共産党、ロシア等のグループの狭間にいるのが現状の日本の立ち位置のようです。昭和二十七年にサンフランシスコ講和条約で独立して主権国家になったと思っ

ていますが、まだまだ米国の属国になっているのが現在の日本であることには、殆どの日本人は気が付いていないかもしれ

ませんし、言い方は悪いかと思いますが、売国奴が政府、マスコミ関係者に入り込んでいて、闇が深いのではないかと、本書を読んで感じました。

この著書の著者には命がけの覚悟も文章の所々に感じ、色々私には気付かせて頂くメッセージも感じ、解りやすい著書でした。

# 恵日だより

案内お知らせ

## \*一泊研修会のご案内

一泊研修会の日程等の内容が、左記の  
ように決定しました。

日時：九月二十九日（日）～三十日  
（月）

参加費：三万五千円

行程：一日目は、興風談所で池田令道ご  
尊師と一緒にお弁当をいただいたあと、  
お話をうかがいます

二日目は、小豆島観光です。（二日目  
の昼食は自己負担です）

募集人員：先着十五名です。

## 【水無月詠草】

釣瓶つるべより水くみ入れし頃はる杳か

〔和風〕

シャワー備はる 湯につかり居て

畑仕事 終え来てシャワー 浴びし後の

初ぜみの声 我に清しも

## 【恵日俳壇】

〔農婦〕

一町田水の程観る青田道  
収穫の農婦細れり大西日

〔森秀之〕

車窓から額縁で観る五月富士  
眼前にそびえ仰ぐ五月富士  
昨日より今日が一番五月富士



講員各位には、奮ってご参加ください！

是非、みんなで有意義な時間を

過ごしましょう

源立寺法華講企画

【訃報】

〔豊能地区〕枚方市

美芳院妙光信女

六月十一日寂

俗名榮田久美子之霊

行年六十二歳

〔豊能地区〕芦屋市

浄妙院法忠信士

六月二十五日寂

俗名小谷忠司之霊

行年七十一歳

〔北摂地区〕豊中市

寿宝院妙千信女

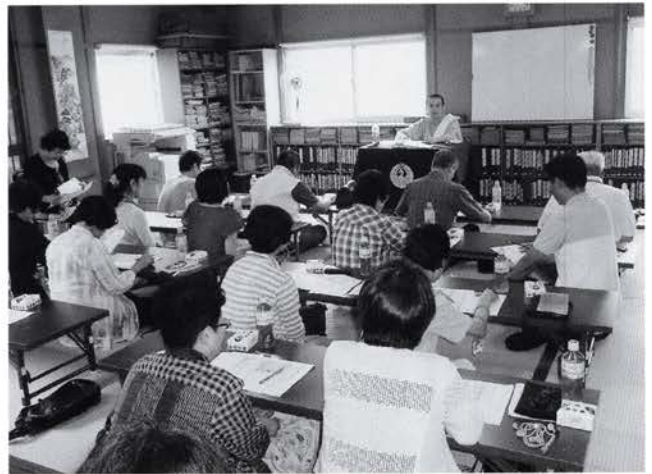
七月十一日寂

俗名佐藤千賀子之霊

行年六十七歳

この度、右の方々がお亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りします。



前回（平成26年）開催された興風談所での講習会の様子

\*お盆お塔婆のご案内

お盆のお塔婆の申込み受け付けを開始しています。なるべく早めに申込みをお願いします。

また、法要の後、塔婆をお墓にお持ちになる方等は、その旨、お申し込みの時にお伝え下さい。

\*靴をお間違いではありませんか

先日の法華講総会で、男性用の黒い革靴がなくなりました。総会の後片付け等が終って帰られるときに、どなたかが間違って履いて帰られたようで、別の靴が残っていました。

靴の履き間違いが無いか、今一度ご自宅の靴の確認をお願いします。

お心当たりの方は、受付までご連絡をお願いします。

大谷吾道師が逝去

臨終間際まで 恵日編集に尽力

寺報「恵日」の発行に創刊より係わってこられ、長年執事として勤められてきた大谷吾道師が、六月二十三日逝去されました。行年七十一歳。

法号は、吾道房日進大徳。

## 七月の行事

- 一日(月) 午後二時 お経日
- 七日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
- 十三日(土) 午後一時 お講・役員会

\*十四日第二日曜日のお講はありません

## 八月の行事

- 一日(木) 午後二時 お経日
- 四日(日) 午前九時 講中勤行会・幹事会
- 八日(木) ～十五日(木) お盆棚経
- 十三日(月) 午後一時 お講
- 十五日(木) 午後一時 孟蘭盆会

※九月号の継命・恵日発送(8月末)は、  
『豊能』地区が担当です。

## ◆お盆の棚経について◆

お盆の棚経は、昨年からお申し出のあったご家庭のみ行っています。今年も八月八日(木)～十二日(月)に実施します。

ご自宅で、ご僧侶を招いて先祖供養を勤められたい方は、八月三日(土)までに受付までお申込み下さい。

早急に日程を調整してお参りする日をお知らせします。(なお、ご希望の日時がある方は、申込みの時にお知らせ下さい。)

源立寺

### 恵日

令和六年七・八月号 通巻三五四号  
令和六年八月一日発行

編集兼  
発行人

菅野 憲道  
恵日編集室

〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内

TEL (072) 751-3335

E-Mail kanno@wombal.zaq.ne.jp

購読料(含送料) 年間二〇〇〇円

加入者名 恵日編集室計

〒振替

口座番号 0138012112649